

都市研究センター副所長兼研究理事

鈴木 敦

この本<sup>1</sup>は、サブカルチャー<sup>2</sup>を分析対象とし、社会科学用語をほとんど用いていないので、一見、オタク本のようなものである。しかし、後述のとおり、グローバリゼーションの意義と反グローバリゼーションの起源に関する優れた考察となっている。

同書は、第1章から第3章において、アニメ、漫画等に頻出する「悪の秘密組織の世界征服計画」に係る理念、実現可能性と便益を分析する。

第4章では、前3章の分析を踏まえ、次の諸仮説が真であると主張する。(便宜上、一般的な経済学、社会学と政治学用語に置き換えた。ただし、括弧内は、著者の用語のまま。)

工業化が進み、高度な生産力をもつ市場経済においては、規格大量生産財に係る需要は飽和し、贅沢品、芸術品、エンターテイメント等に係る需要のみが増大する。

贅沢品、芸術品、エンターテイメント

等は、製作者の高度な自由が認められない社会では、よいものが生まれない。すなわち、計画経済は、優れた贅沢品、芸術品、エンターテイメント等を生産できないし、また、特権階級が自らの嗜好を製作者に押し付けてもだめ。

一方、欧米諸国の市場経済は、かつて王侯貴族が独占していた贅沢品、芸術品、エンターテイメント等またはそれらの廉価版を誰もが市場で買える状態にした。ところが、かつては、情報の伝達に制約があり、特定の集団は、他の集団の知ることを知らなかったのが、実際には買えるのに、買おうという意欲が生じなかったり、買うことを躊躇ったりした。それが、階級の壁だった。しかるに、情報の制約は、次第に減少し、ついに、インターネットの普及に伴い消滅した。

要するに、いま我々が最も欲している贅沢品、芸術品、エンターテイメント等は、1人当たり GDP が大きく、個人の自由が保証された、市場経済の民主主義社会でしか調達できない。同時に、それらを入手するに当たり、権力、階級等の差は関係なくなってしまった。

グローバリゼーションとは、NIEs、BRICs 等新興工業国の台頭と社会主義経済圏の崩壊後、貿易と資本・労働の移動が急激に活発化し、市場経済と民主主義の理念が普及しつつある過程

<sup>1</sup> 2007年6月刊。ちくまプリマー新書

<sup>2</sup> サブカルチャー(subculture)とは、大集団の文化(culture)と区別できる少数集団の文化を指す。年齢、人種、民族、階級、性別等に応じて生じる。例えば、我が国のアニメ、漫画等は、かつて、青少年のサブカルチャーであったが、成人した元青少年の一部が彼らのサブカルチャーにした。なお、いわゆる高尚な文化は、ハイカルチャー(high culture)と呼ばれる。

と解される。「世界征服」後、支配者層がその便益を享受するためには、市場経済と民主主義を温存し、グローバリゼーションに乗るしかない。それは、現状維持(status quo)を意味するから、「世界征服」を試みるのは無意味。

富の収奪、体制の保全又は文明の伝播のための世界征服は、過去と現在の国家(帝国)の行動である(それぞれ、スペインと大英帝国、旧ソ連と冷戦期の米国、ローマ帝国と現在の米国が実例)。しかし、上記のとおり、非国家組織にとり意味のある「世界征服」とは、「『正しい』価値観ですべてを支配」することしかなくなった。「現代の価値・秩序基準」である「経済主義とネット」「経済と情報の自由化」「自由経済原則」「階級の無意味化」「いいものを、より安く」「トレンドに敏感に」「自分のしたいことを探そう」を否定し、いま現在の幸福と平和を拒否し、新しい幸福と平和を世界に宣言することが「世界征服」である。

具体的には、「地域通貨の見直し」「経済優先ではなく、フェアネス・トレード」「ボランティアによる非営利団体活動」「ネットでなく、人と人との直接の交流」「人を出し抜いて得するのはやめよう」「お年寄りを大切に」「ちゃんと学校で勉強しよう」等を推進する運動。伝統社会の諸価値(traditional values)を復活し、権威主義的社会(authoritarian society)を再構築すること。

同書は、主として、アニメ、TVドラマ、漫画等サブカルチャー作品を題材に、実際の歴史においては、国家または民族という最

大規模の集団以外は企図したことのない「世界征服」を、小集団で実現し、維持するマネジメントのシミュレーションを行い、その難しさを示す。(不可能とは言っていない。)

次に、歴史上の国家(帝国)は、富の収奪、体制の保全又は文明の伝播を目的とする世界征服をしたが、小集団にとりこれらの目的は無意味であり、小集団にとり意味のある「世界征服」は、論理的には、「現代の価値・秩序基準」である情報化とグローバリゼーションを拒否し、伝統的な価値を復活し、権威主義的社会を再構築することであると結論する。(コミットしてはいない。)

なお、第1章から第3章は、マネジメント論と組織論とも捉えることができる。「悪の秘密組織」をつくり、それを率いて「世界征服」する目的(第1章)、支配者のタイプ分類(第2章)に続き、第3章では、目的設定、人材確保、資金の調達と設備投資、作戦と武装、部下の管理と粛清、守成を段階的に論じる。動機付け、シンボリック・リーダー、ヒューマン・キャピタルその他、普及した新旧の経営理論と同じ。

最終章の定義する「世界征服」活動は、普通、「反グローバリゼーション運動」と呼ばれている。単に、サブカルチャー作品の舞台回しのための観念とみなされていた「世界征服」から話を起こし、反グローバリゼーションの本質を明らかにしたのは、なかなかの力業である。

なお、「世界征服」は、論理的には、反グローバリゼーション運動に限らず、イスラム政治主義(イスラム原理主義)と環境主義(environmentalism)を含むと考える。いずれも、いまの世界を覆う価値観を否定する。

(了)